

悪七兵衛平景清

沼波守

世人に知られてゐる景清の行蹟の、據つて來る所と、その眞偽とを知らうとすると共に俗傳といふものが、いかに野方圖のほうずに進行してゆくものであるかの一例を景清傳説を通じて知らうとするのであるが、記憶力の元來よくない私であるのが、老來益々記憶力が衰へたのと、手許に参考書の乏しい上に、圖書館や藏書家へ足を運んで閲讀する根氣がないので、どんな事になるか自分でも見當がつかない。もしうまいつたらお慰といふ代物で、お恥しい次第である。

景清の行蹟として世人の傳へてゐることは、

- 一、屋島での鑑引とらひの事
- 二、清水觀音の信者で、觀音の利益を蒙つた事
- 三、熱田の大官司の掣であつた事
- 四、清水坂の遊女に馴染んだ事
- 五、大佛供養の折、頼朝を討たうとして、畠山重忠に見現はされて果さなかつた事
- 六、所持の刀を痣丸といふ事

七、破牢の事

八、自ら兩眼を抉り取つた事

九、晩年を日向國で送つた事

十、人丸姫が、日向に父景清を尋ねた事

以上の十點であると思ふ。

舞の本「景清」では、一の鉤引と、十の人丸姫が日向に父景清を尋ねる事がないだけで、他の八ヶ條は全部含まれてゐる。説明の便の爲めに、舞の本「景清」の梗概を記すといふが、紙數が多くなるのを憚つて省略する。その全文は「新群書類從」、第八、舞曲部に収録されて居るし、梗概は平出堅二郎氏の「室町時代小説解題」に載つて居るから、志のある方はそれらによつて讀んで頂き度い。

前に擧げた十ヶ條のうち八ヶ條まで舞の本の「景清」に含まれて居るといふ事は、此の頃までに景清傳説の概念が、既に定まつてしまつたといふ事になる。これからその八ヶ條を逐次検討してみよう。

二、景清が清水觀音の信者であつたとの事

謠曲「大佛供養」に

これは平家の侍悪七兵衛景清にて候。我この間は西國の方に候ひしが、宿願の仔細あるにより、この程罷り上り清水に一七日參籠申して候。

とあり、舞の本の「景清」には、景清は六條河原で梶原源太の爲めに首を斬られたが、これは清水觀音が身代り

になつたので、景清は無事であつた。「是と申すも、景清が十六の春よりも三十七の今まで、参りたる利生と思へば」難有さは限りもないとなつて居り、恐ろしく堅固な牢を破り得た超人的な力量も、自ら抉つた兩眼が再び生じたのも、ともに清水観音の御利生といふ事になつて居る。

能と幸若舞とは、どちらが古いかは今のところ不明のやうであるから、謡曲から舞の本が構想したとも、舞の本から謡曲が出来たともいはれないし、双方とも同一の傳説から取材したとも云はれるかもしれないが、筋が簡單なので、こゝでは謡曲をさきに引くことにした。

長門本「平家物語」卷二十に、平家の侍主馬八郎左衛門盛久は清水観音の信仰者で、等身の千手観音を造つて、清水寺の本尊の右脇に据ゑ奉つて、清水寺へ千日の日參を志してまた中途で捕へられて鎌倉に送られ、文治二年（一一八六）六月二十八日、土屋宗遠が命をうけて盛久を由井が濱で斬ることになつた。宗遠の初太刀が中から三段に折れた。再び打つ太刀は目貫から折れた。富士の裾から光が二筋さしてきて盛久の身にあたつた。宗遠不思議に思つて、使者を立て、此事を頼朝に注進させた。又頼朝の妻も盛久の命を助けよといふ清水観音の靈夢を見た。頼朝は盛久を助けたのみならず、紀伊國の盛久の所領を返し與へ、なほ越前國池田ノ庄をも與へた。といふ記事がある。これが舞の本「景清」の清水観音の奇瑞や、景清が頼朝から日向國宮崎庄を與へられた話の原據かと思はれる。

この盛久の事件は、謡曲「盛久」にもあるし、「東海道名所圖會」卷六に、塔ノ辻の南に盛久頸座の跡を傳へて居る。ところで少々餘談にわたるが、日蓮上人の龍たつの口の危難の時に盛久同様の話が傳へられ、上人袈裟掛の

松、行合川（上人の奇瑞を注進の使と赦免の使との行合つたからの名といふ）等の遺蹟が傳へられ、この方が有名になつたので、此頃の人は、上人の方だけを知つて、盛久の方を知らない人が多いけれど、東京上野の清水堂（秋色櫻で有名な堂）に盛久由井ヶ濱危難の繪馬が掛つてゐたのでも、昔は盛久の方も相等に有名であつた事が察しられる。

盛久と日蓮上人とでは、一方は清水觀音の奇瑞、一方は法華經の功德といふ點で異つてゐるだけで、あとは大體同様な話である。これは、盛久と日蓮上人と異つた二つの傳があつたと見るよりは、どちらか先きに一方が出來て、他がこれを模したと見るのが自然であらう。そしてその前後については、「長門本平家物語」の成立年代がはつきりしない以上、どちらとも云はれないけれど、盛久の方が前であつたのぢやあるまいかといふ氣がする。

三、熱田の大宮司の掣であつた事

賴朝が熱田の大宮司、藤原季範の女を母としたといふ事は事實で、久安三年（一一四七）四月八日熱田で生まれたと傳へられ、産湯に用ゐられた井戸といふものが、名古屋市熱田區旗屋町の誓願寺（まじくろを）といふ尼寺の内に現存してゐる。熱田神宮西門のすぐ傍である。しかし景清が大宮司の掣であつたとは、信すべき本據はない。謡曲「景清」に、

我一年尾張國熱田にて遊女と相馴れ一人の子を設く、女子なれば何の用に立つべきぞと思ひ、鎌倉龜が江が谷の長に預けおきしが……

とあるのが景清と熱田との繋りで、この娘が人丸姫で日向に景清を尋ねるのであるが、尾張の熱田には景清の屋敷跡と稱する所もあり、同所大瀬古には景清社がある事は「尾張名所圖會」に出て居る。今の熱田區神戶町である。この景清社が眼病に靈驗があるといふのは、景清が自ら兩眼を抉つたのが、清水觀音の御利生で再び生じたといふところから來たものであらう。舞の本の「景清」では、景清は頼朝を三十七度狙つたとあるのに、頼朝は最後に景清を赦して、日向宮崎の庄を與へることになつて居る。清水觀音の御利生に感じての事であるが、それだけでは世人を納得させ難いと思つて、謡曲「景清」にある熱田の遊女に馴染んだといふ事から、熱田の大官司の娘（近松の「出世景清」では小野姫といふ名になつてゐる）の掣としたのではあるまいか。頼朝が大官司の娘腹といふ事は世間周知の事であるから、頼朝が景清に寛大であつたのも景清が大官司の掣ならば觀客も成程と思つたであらう。景清が熱田の大官司の掣であるといふ傳説は、可成り信じられたとみえて、景清屋敷跡、景清社のほかに、新井白蛾の「牛馬問」卷三には、

勢州桑名にいたり（白蛾がである）、十日餘りも彼易學物がたりに日を送りぬ。世談に及んで一客の曰、悪七兵衛景清は、當所七村の産といへり。おもふに景清、熱田の大官司とも縁有りなど申しつたふの類より引きくらぶれば、此説近からん歟。七は氏、兵衛は官なり。七村は桑名より近き村なり。

と記してゐる。舞の本「景清」では熱田大官司の三の姫との間に二人の男子があつた事になつて居る。

四、清水坂の遊女に馴染んだ事

前記謡曲「景清」では熱田の遊女に馴れて人丸といふ娘があつた事になつてゐるが、舞の本「景清」では、清

水坂のほとりの「あこわう」といふ女に九年來馴染んで、「いやし」「いやわか」二人の男の子があつたといふ事になつて居る。この「あこわう」が近松の「出世景清」（貞享三年（一六八六）二月）では阿古屋となるのであるが、「あこわう」は「壇浦兜軍記」（享保十七年（一七三二）九月九日）の阿古屋のやうな貞節な女ではなく、景清を討つか擲めて差出した者には勸賞望みの儘との立札を見て、慾心をおこし、景清を訴人したので、頼朝は三百餘騎を討手としてさし向けた。景清は二人の男子を刺殺し、討手を斬伏せて逃れ、大宮司を頼んで尾張へ落ちた。「あこわう」はまたこれを訴人したので、頼朝は命じて「あこわう」を加茂と桂との落合「いなせがふち」にふしづけにさせてしまつたとなつて居る。

「あこわう」一件については、また「長門本平家物語」二十卷に、原據と思はれる話が載つて居る。それは越中の次郎兵衛盛次の話で、盛次は但馬國に落ちて、氣比の權守道廣の許に隠れて居るうちに、道廣の娘と通じた。盛次は忍んで度々京へ上つて、馴染の女の家へいつた。その女に尋ねられるまゝに、道廣の許に居る事を告げた。この女から盛次の在所を聞いたある男が訴へ出た。頼朝は氣比の權守道廣に盛次を擲めて出すべきを命じた。建久五年（一一九四）の事で道廣は大番で在京して居たので、妹婿の朝倉大夫高清や家人達に、道廣が此の事を命じた。盛次は溫室（湯殿）で捕へられ、頼朝に對つて義經を狙つたが果さず。腰刀の金のよいのも、矢尻の金のよいのも、頼朝をと思つて惜しみ持つて居たが、かく捕へられては力及ばずと歎息した。頼朝は生かしておいて召使ひたいと思つたが、平家の侍の中で一二の者だから、虎を養ふ憂があるといふので、遂に盛次は斬られた。といふのである。

この話は「あこわう」の景清訴人の原據であるばかりでなく、景清が熱田の大宮司の許に隠れてゐた關係も、この盛次の話から來たと思はれる。

この「あこわう」が近松の「出世景清」では、阿古屋となり、訴人したのは阿古屋の兄伊庭十藏廣近で、阿古屋はその申譯に、景清の牢の前で、いや石、いや若二人を刺殺して自分も自害する事になつてゐる。舞の本「景清」では「あこわう」の兄は見えて居ない。この十藏は「長門本平家物語」の盛次の話に見えたある男からきたものかと思はれる。「壇浦兇軍記」では、阿古屋の兄は井場十藏（カサヒ）一幸といひ、容貌が景清に似て居るので、身代りになつて景清を救はうといふ義俠者となつて居る。これが後歌舞伎に「二人景情」（元文二年（一七三七））十一月江戸、河原崎座、「閨月（つひづき）仁景清」の出來る元である。阿古屋といふ遊女が實際にあつたのか、それともこれらの作から實在の人物だと誤認されたのかは知らないが、「都名所圖會」卷二に、京都六波羅密寺の本堂の北にあるのが、五條坂の遊女阿古屋の塚であるとの記事がある。

五、大佛供養の折、頼朝を討たうとして、畠山重忠に見現はされて果さなかつた事。

謡曲「大佛供養」に作られて居る。これには景清の母が若草邊に居るのを、景清は事前に訪ねて母子名残を惜しむ事があるが、これは後の諸作には餘り用ゐられて居ないやうである。景清を見現はしたのは誰とも名は明示されて居ない。見現はされた景清は大勢と奪戰の末に、

今は景清これまでなりと、少し祈念を致しつゝ、彼の瘴光をさしかざせば、霧立ち隠すや春日山、茂みに飛び入り落ちけるが、又こそ時節を待つべけれど、虚空に聲して失せにけり。

といふ事になつてゐる。この霧の法を用ゐて身を隠したといふ事は、舞の本「景情」でも

残りのつはもの共に痛手薄手を負ふせて、四方へはつとおつ散らし、霧の法を結んで、我身にさつと打ちかけ、春日山へつつと入り世間の態を聞き居たり。

となつて居る。そして見現したのは重忠で、手害門の邊といふ事になつてゐる。

大佛供養は建久六年（一一九五）三月十二日の事で、「吾妻鏡」十四卷の同日の條には、景清の事など見えてゐない。たゞ見聞の衆徒が門内に群入の時に、警固の武士との間に口論が起つた。梶原景時が鎮めにいつて、聊か無禮であつたので、衆徒が怒つて騒ぎは益々甚しくなつたのを、小山七郎朝光が頼朝の命によつて見事に衆徒を鎮めた旨の記事がある。この些細な事實と、景清の兄上總五郎兵衛尉忠光の事と薩摩中務承宗助の事によつて、景清大佛供養の日の大亂闘といふ事が作出されたのであらう。

忠光の事といふのは、大佛供養よりも三年前の事で、「吾妻鏡」卷十一、建久三年（一一九二）正月廿一日の條に

廿一日、甲午、渡御于新造御堂地、犯土之間、運土石疋夫等之中、有左眼盲之男、幕下覽怪之、彼者自何國、誰人進哉之由、被尋仰、仍景時雖相尋之不分明、被召寄御前、佐貫四郎大夫伺御目、面縛之處、懷中帶一尺餘打力、殆如寒氷、又覽其盲、以魚鱗覆眼上、仍彌知食有害心者之由、被推問之、名謁申云、上總五郎兵衛尉也、爲奉度幕下一數日經廻鎌倉中云々、卽下賜于義盛、可被召尋同意之輩之旨、被仰合之云々。

とある事件である。瀧澤馬琴は「玄同放言」巻二に、景清が盲目となつたとの傳説の原據として、右の「吾妻鏡」の忠光の條及び燕の高漸離の故事を引いて居る。成程尤な意見であるが、私はそのほかに前述のやうに景清が大佛供養の日頼朝を狙つたとの話も、この忠光の話に幾分かの關係をもつて居りはしないかと思ふのである。さて忠光は「吾妻鏡」によれば、同年二月廿四日、武藏國六連海邊で梟首されたのである。

薩摩中務丞宗助の話といふのは、「長門本平家物語」巻十九に、出て居る話で、これこそ景清そつくりの事件である。全文を引かう。

鎌倉殿、大佛供養の隨兵の守護の爲に、建久六年二月に御上洛、同三月十二日南都へ入らせ給ふ。大衆恐れて引きたるが、悉くある中に、怪しばみたる者見えければ、梶原を召して、入らせ給ひつる南の大門の東のわきに、怪しばみたる者有りと、大衆の中へかきわけ／＼入りて、頭曇みたる袈裟を引剥ぎて見れば、髭をばそりて頭をばそらざりけり。何者ぞと問ふに、平家の侍薩摩中務丞宗助と申者にて候なり。それはいかにといへば、もしや（とヲ脱セルカ）君をねらひ參らせ候とてなりと申せば、鎌倉殿打ちうなづかせ給ひて、汝が心ざし神妙なりとて、召置かれて、大佛供養果て、都へ御上り有りて、宗助をば六條河原にて斬られにけり。

といふのである。これこそ大佛供養の日に景清が頼朝を狙つたといふ話の原據であらう。しかし宗助の話も單なる傳説に過ぎないであらうことは、前に引いたやうに「吾妻鏡」の大佛供養の日に見えて居ないし、「吾妻鏡」巻十四、建久六年四月一日の條に、

一日、丙辰、於勸解由小路京極、結城七郎朝光、三浦平六兵衛尉義村、梶原平三景時擲取平氏家人等、是前中務丞宗資父子也、此十餘年晦跡云々。

とあるので察しられる。

この「長門本平家物語」にいふ宗助の話が、前述の「吾妻鏡」の大佛供養の日の口論と、鎌倉での忠光事件とから出た事で、その宗助がまた景清となつたのであらうと思はれる。天野信景は「鹽尻」卷十九で、

世謂惡七兵衛景清頼朝をはからんが爲に、南都大佛供養の時、大衆のまねして顯はれしと、亦云眼に魚鱗を覆ひ盲人の形となりて幕下を伺ひしといへり。

按に東大寺にて大衆の如くして伺ひしは、薩摩中將といひし者也（保曆間記の中）。鱗を眼にあてはかりしは、上總五郎兵衛尉なり（東鑑十二）。これらの事古書世に出でざりし時、誤りつたへて皆景清とせり。と記して居る。

舞の本の「景清」では、頼朝を狙つたのは大佛供養の日だけではなく、翌日は山伏姿となつて般若寺で、これも重忠の爲に果さず、またもや霧の法で遁れ、其他清水坂、谷の塔、峯の塔、桂、常磐の里など三十七度狙つて果さなかつたとなつて居る。近松の「出世景清」でもそのまゝ踏襲して

斯う申す景清は二相を悟り候へども、重忠は四相を悟る、頼朝に出合ひ既に討たんとせしこと三十四度に及べども、彼の重忠に隔てられつひに本望遂げ申さず。

としてある。

六、所持の刀を瘧丸といふ事

前に引いた謡曲「大佛供養」に、「彼の瘧丸をさしかざせば」とあるところを見ると、瘧丸のことは有名であつたと思はれる。舞の本「景清」では大佛供養の日の景清の扮装を記した中に「おほい殿よりも給はりたるあざまるといふ打刀を十文字にさすまゝに」と記して居る。近松の「出世景清」では、「北の方（大宮司の妻）も悦びて、宗盛公よりたび給ふ瘧丸といふ名剣を景清に給はり……」となつてゐる。この瘧丸については淺學の私にはこれ以外に出典は考へられない。

七、破牢の事

舞の本「景清」では、源氏方が景清を捕へる手段として、熱田の大宮司を京に召し上せて入牢させた。これを知つた景清は自ら名乗つて出て捕へられ、特別に造つた恐ろしく頑丈な牢に入れられた。ある時牢の邊を京童が、あれほど強い評判の景清も、源氏方にはもつと強い者が居るから牢に入れられたのだと嘲つて通るのを聞いた景清が、観音を念じて、さしにも頑丈な牢を破つて、清水観音に詣で、再び牢に戻つて居た。といふことになつて居る。

近松の「出世景清」では、伊庭十藏が嘲弄したので破牢して出で、十藏を引裂いて再び牢に入つて居たのである。ともにたゞ景清の勇力を誇示しただけの事である。「壇浦兜軍記」では牢破りは陰になつてゐて、頼朝はあくまで景清を味方にしようと思つて情をかけるので、景清は牢を破つて科よを重ねて殺されんが爲の破牢である。

歌舞伎十八番の内に「景清」がある。一體江戸歌舞伎では景清は曾我狂言の中に取入れられたのが多く、團十

郎が荒事として演じてゐる事が多い。この十八番の景清もその一例で、初演は元文四年（一七三九）市村座の「初誓通會我」の一部で、羽生村與右衛門實は悪七兵衛景清（市川海老藏——二代目團十郎）で景清の破牢を中
心としたもので、俗に牢破りの景清と呼ばれて居る。これは鎌倉の土牢を破つたのである。「東海道名所圖會」
卷六に

景清牢窟 化粧坂にあり。傳云、悪七兵衛景清を捕へてこゝに籠置きしとぞ。今見るに窟中淺くして牢とすべき物にあらず、古ありしは頽廢して後世准へ作るもの歟。傍に向陽庵といふあり、こゝは景清が女の開基にして景清が守本尊十一面觀音を安ず。

とある。歌舞伎十八番の景清にでも據つて後人の假託したものであらう。

八、自ら兩眼を抉り取つた事。

謡曲「景清」は盲目であるが、どうして盲目となつたかは記されてゐない。舞の本「景清」では、頼朝の恩に感泣しながら、頼朝を見ると一太刀恨みたいとの思がおこるから、見ないやうにと兩眼を抉つた事になつて居る。「出世景清」も「壇浦兜軍記」も同様である。

これは五に記した「玄同放言」の馬琴の説のやうに、「吾妻鏡」に見える上總五郎兵衛忠光と「史記」、刺客列傳二十六、判判傳中にある高漸離の事によつて構想されたものであらう。

九、晩年を日向國で送つた事

謡曲「景清」に見えて居る。舞の本「景清」では三十七で兩眼を抉り、日向に下り、八十三歳で大往生を遂げ

たとなつてゐる。しかしこれでは兩眼を抉つてから清水に詣で、觀音の御利生で再び兩眼が明らかとなつたとあるから、日向での景清は盲目ではない。「出世景清」も「壇浦兜軍記」も、景清喜んで日向國へ下向とて筆をためて居る。そして觀音の御利生で兩眼が明らかになつた事はないから、盲目であつた筈である。

景清の晩年については「長門本平家物語」卷十九に、

同（建久）六年三月十三日に大佛供養あり、平家の侍上總惡七兵衛景清、鎌倉殿へ降人に参りたりければ、和田左衛門尉義盛に預らる。昔平家に候し様に少しも口へらず、和田左衛門に所をも置かず、一座をせめて盃先に取、或は梶かきのわきに、馬引寄せて乗りたりなどして有ければ、もて扱ひて、他人に預給へと申ければ、常陸國住人八田左衛門尉知家に預らる。

なほ同書卷二十に、

上總惡七兵衛景清は、降人に参りたりけるが、大佛供養の日をかぞへて、建久七年三月七日にてありけるに、湯水をとめて終に死にけり。

とある。これらの記事を真とすれば、景清日向下りは作者の假構といふことになる。思ふに前に二の項に記した「長門本平家物語」にある、盛久が越前國池田ノ庄を頼朝から與へられたとの話をもとにして、景清が日向宮崎庄を與へられたといふ事を作り出したのであらう。

なほ前記景清が湯水をとめて死んだとの「長門本平家物語」卷二十の記事は、前にも記した「吾妻鏡」卷十一、建久三年二月廿四日に

廿四日、丁卯、於武藏國六連海邊、囚人上總五郎兵衛尉忠光鼻首、義盛奉_ニ行之_一、日來斷_ニ漿水_一云々、推問之間、申云、更無_ニ同類_一、但越中次郎兵衛尉盛繼、去年之比隱_ニ居丹波國_一、彼同存_ニ會稽之志_一歟、於_ニ當時_一者難_レ知_ニ在所_一、會不_レ定_ニ一所_一云々。

との記事がある。この忠光が景清と誤傳されたのではあるまいか。

この記事で見ると、四の項で記した「長門本平家物語」の越中次郎兵衛盛次（吾妻鏡、盛繼）が但馬に隠れたといふのは丹波の誤りかも知れないが、頼朝を狙つたとの事は事實らしい。なほ「吾妻鏡」卷十二、建久四年三月十六日に

十六日、癸未、平家與黨越中次郎兵衛尉盛繼以下、隱_ニ居近國_一之由、有_ニ風聞_一、早可_ニ追討_一之由、被_レ仰_ニ兵衛尉基清_一云々。

ともある。

十、人丸姫が、日向國に父景清を尋ねた事

謡曲「景清」はこの事で一曲をなしてゐる。舞本「景清」、「出世景清」、「壇浦兜軍記」共に此の事にはふれて居ない。「近世邦樂年表、義太夫節之部」の寶永四年（一七〇七）三月三日、豊竹座の「増補日向景清」（正本未見）とあるのは多分人丸が日向に父景清を尋ねた事を中心とした作であらう。享保十年（一七二五）十月二日、豊竹座「大佛殿万代石礎」、及びその改作明和元年（一七六四）十月廿一日、豊竹座「嬢景清八島日記」は共に人丸姫が日向に父を尋ねる苦心を中心とした作である。竹本座が「出世景清」、「壇浦兜軍記」共に謡曲「景清」の

筋をとらなかつたのに、豊竹座の方でこれを基とした作を上演して居るのは、對抗意識からでもあらうか。

九の項に述べたやうに、景清が日向に下つた事が何等根據のない作り話である以上、この人丸姫が尋ねてきたとの事も事實でない事は明らかである。佐成謙太郎氏は謡曲「景清」は、「平家物語」の有王島渡りからの構想であらうといつて居られる。

しかるに新井白蛾の「牛馬問」、百井塘雨の「笈埃隨筆」、蜀山人の「一話一言」等に日向宮崎に景清の墓のある事を記してゐる。「増訂一話一言」卷十二に黍叟堂談として

日向國宮崎ニ景清ノ碑アリ、銘ニ云

水鑑景清大居士

年號八年ヲ歷テ消ス委キコト不知、碑石ヲ削テ病メル者服スレバ病愈ニヨツテ大石ナレドモ過半削リ去ル、ユ
 エニ年々新ニ碑ヲ建ルト云フ、近來四方ヲ圍鏡ヲメ閉、最別當アリ沙汰寺ト云、告ル所アレバ法師出テ拜ヲ免
 ス、此地鶉ノ名物也、晉清亮ナルヨシ、此邊ノ村々木ニテ鶉ヲ造リ賣ヨシ、參人ノ土産トス、同所生目村ア
 リ、村中ニ生日八幡アリ、景清クル所ノ兩眼ヲ祀ルト云、神奴モアリ、今ニイケルガ如シ。

南畝按、秋月家臣云、此ウヅラハ片目鶉トテコトク片目也ト云。

とある。兩眼を抉つたのが宮崎でのことになつてゐるなどは面白い。「牛馬問」卷一も景清の墓の在所を宮崎郡竹篠村沙汰寺としてゐる。「笈埃隨筆」卷一では

上北方村に妙法寺といふ眞言寺の境内に古墳あり。文字もなし。景清が塚なりといふ。其傍に景清が女の人丸

姫の碑石もあり。父景清を慕ひ來りて、こゝに終れりとなり。

とあり、景清の歿年を建保二年甲戌八月十五日としてある。舞の本「景清」に、頼朝に眼をさし出すところに、「十六の春より三十七の今まで」とある。これに據つて大佛供養の建久六年（一一九五）、景清を假りに三十七歳とすれば、建保二年（一二二四）は五十六歳の筈で、舞の本「景清」にいふ八十三歳での大往生ならば仁治二年（一二四一）に死んだ事になる。「笈埃隨筆」に「文字もなし」とありながら、この景清の法名及び歿年が記されてゐるが、何によつたといふ記述もないので解らないが、寺僧にでも聞いたのであらう。俗傳といふものがかにも野方圖であるかの一例として面白い。「笈埃隨筆」にはなほ上總國布施村の一寺の門前の大きな五輪が景清の墳だと傳へられて居るとも記して居る。

人丸姫の墓については、「東海道名所圖會」卷六に鎌倉の巽荒神たつみの東、畠の中にあり、その南の畠が尊氏の屋敷蹟だと記してある。同じ嘘にしても人丸姫が景清の守本尊十一面觀音を祀つて、景清の牢の傍に向陽庵を開き、同じ鎌倉で死んだといふ方が最らしい。

一 屋島での鍛引しころの事。

舞の本「景清」にふれて居ないので、後になつたが、鍛引は流布本「平家物語」にも、謡曲「八島」「景清」にもあり、舞の本「景清」にこそないが、淨瑠璃・歌舞伎にも演じられて、景清傳説中一番に有名であり、或は本當かもしれないと思はれる事件である。

まづ流布本「平家物語」では卷十一、「弓流の事」にあつて、相手は武藏の國の住人美尾の屋の十郎で

兜の鍔をば長刀の先に貫き、高くあし上げ大音聲をあげて、「遠からむ者は音にも聞け、近くば目にも見給へ、これこそ京童の呼ぶなる上總の悪七兵衛景清よ」と名乗り棄てて、御方の楯の陰へぞ退きにける。とある。いかにも花々しい武者振である。

「長門本平家物語」では卷十八、相手は常陸國の住人水深屋十郎とある。謡曲「景清」では盲目老衰の景清が、遙々尋ねてきた娘人丸の所望によつての昔語りとなつてゐて、相手は三保谷とのみあつて十郎とも四郎ともない。謡曲「八島」では義經の亡靈が諸國一見の僧に屋島合戦をする。その中に鍛引も語られるので、相手は三保谷の四郎となつてゐる。舞の本「景清」を殆んど其儘請繼いだ近松の「出世景清」では、舞の本で用ゐなかつた鍛引を、景清が頼朝の面前で語ることになつてゐて、相手は箕尾谷とのみで四郎とも十郎ともない事、謡曲「景清」と同様である。この事及びその文章からみて、近松は謡曲の「景清」に據つたと思はれる。しかしそれは、淨瑠璃では、鍛引は「出世景清」が最初だといふのではない。既に古淨瑠璃、土佐少掾橘正勝の「大やしま」のぼり八島ともいふの五段目にも景清の鍛引は綴られてゐる。

「壇浦兜軍記」では、鍛引で恥辱をとつた相模の箕尾谷四郎國時が、景清を搦取つて恥辱を雪がんと辛苦するといふ筋である。しかも國時は景清の弟で、これを知つた景清はわざと國時に捕へられるといふのが趣向である。

景清の相手は三保谷の十郎でも四郎でも、鍛引の事は平家にも謡曲にもあるので、或は事實かとも思はれるが、「源平盛衰記」には景清の鍛引の事はない。即四十二卷、屋島合戦附玉蟲扇を立て與一扇を射る事の章に、

武藏國の住人丹生屋十郎、同四郎等喚きてかかる。……先陣に進む十郎が馬の草別を、箆際射込みたれば、馬は屏風をかへすが如く倒れけり。十郎足を越して馬手の方に落ち立つ處に、武者一人長刀を額に當てて飛んで懸る。十郎叶はずと思ひて、貝吹いて逃ぐ。逃ぐるも追ふも電の如し。十郎希有にして逃げ延びて、馬の陰に息突き居たり。敵長刀をつかへて扇開き仕ひ、「今日此の頃童部までも沙汰すなる上總の悪七兵衛景清、我と思はん人々は落ち合へや、大將軍と名乗り給ふ判官は如何に、三浦、佐々木はなきか、熊谷、平山はなきか、打物取つては鬼神にも負けじと云ふなる畠山はなきか、組めやく。」といへども名にや恐れけん打つて出づる者はなし。

と、流布本平家と同様な場面が描かれて居るけれど、鍛引がない。ところで盛衰記には景清と三保谷でない他の人々の鍛引を傳へて居る。それは同じ章の右の文より稍後、義經の弓流のところに

小林神吾宗行と云ふ者あり。越中次郎兵衛盛嗣が熊手を以て判官を取らんとしけるを、大將軍を懸けさせじとて、續いて游がせたりける程に、事由なく上り給ひたりければ、盛嗣、判官をかけ外して安からず思ひ、游艇に乗り移り、差寄りて宗行が兜の吹返に熊手をからと打懸けて、曳聲を出して引く。宗行鞍の前輪に強く取付きて鞭を打つ、主も究竟の乗尻なり、馬も實にすくやかなり。水に浮べる小船なれば、汀へ向ひ舳浪つかせて、さゝめいで引上げたる。宗行、熊手に懸けられながら馬より飛び下り、貫帯きたりけるが、沙に足を踏み入れつつ、頸を延べて曳々とぞ引きたりける。盛嗣も大力、宗行も健者、勝負何れも見えざるけり。金剛力士の頸引きとぞ覺えたる。兩方強く引く程に、鉢付の板ふつと引ききり、鉢は残りて頭にあり、鉢は熊手に留ま

りぬ。

とある。鑑引についてはつまり景清と盛嗣と二通りの傳へがあつたわけである。

以上述べ來つたやうに俗傳の景清の行蹟は、「吾妻鏡」や「長門本平家物語」に據れば、忠光や、盛久、宗助（宗資）、盛次（盛繼、盛嗣）の事を基として作り出された、といつてゐるれば、その誤傳。他は作者達の假構といふ事になる。唯一つ眞に近いかと思はれる鑑引でさへも、源平盛衰記の異傳があるとすれば、景清の俗傳一つとして信用することが出来ないといふ事になる。それがかく色々な事件が景清として傳へられてゐるといふ事は、彼自らが「京童の呼ぶなる上總の悪七兵衛景清」と名乗つたと「平家物語」にあるやうに、當時剛勇の名が高かつたこと、悪七兵衛景清といふ名が、いかにも強剛らしく且ついかにも語路がいゝせぬだと私は思ふ。その悪七兵衛といふ名は、伯父の大日坊を殺したが爲めだと傳へられ、「壇浦兜軍記」には第一段に大日坊殺しが仕組まれてゐるが、天野信景が「鹽尻」五十四卷に、「此事出書何にありや猶尋ぬべし」と記してゐるやうに、これ亦眞偽の疑はしい事である。

昭和二十九年三月十九日